都藝泥布

京都地名研究会　会報　第８５号

令和６年８月２４日　発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫　吉田 金彦氏（初代会長）

編集　京都地名研究会事務局

処暑の候、今年も焼けつくようなきびしい暑さが続きましたが、会員のみなさまにおかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。

2024 年 4 月 28 日、第 22 回総会および講演会を龍谷大学大宮学舎東黌 301 で開催しましたところ、講演会には 40 名の方がご参加（会員 32 名・非会員 7 名・講師 1 名）くださいました。

運営に際して、お世話になったみなさまに紙上をお借りしてお礼申し上げます。以下にその内容をまとめましたので、ご覧ください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

総会での審議事項紹介

会員の高齢化がいっそう進行するなか、会員数およびフォーラムの参加者の漸減（ぜんげん）と、発表者の固定化が、検討課題として挙げられた。それに伴い財政的にも苦しい状況が続き、2024 年 10 月には、郵便料金の大幅値上げが予定されるなど、さらに厳しい環境に直面している。会員の負担増を避けるためにも、活動規模の縮小は避けられず、7 月の地名フォーラムを削減することを提案、了承された。

一方で活動計画の内容を見直し、「町名を考える会」を発足し、月に一度の例会（第二日曜原則）を開催するなど、好奇心や問題意識を共有できる協働的な研究活動を始めた。会員の発表意欲を掘り起こせるような活動をめざすことが確認された。

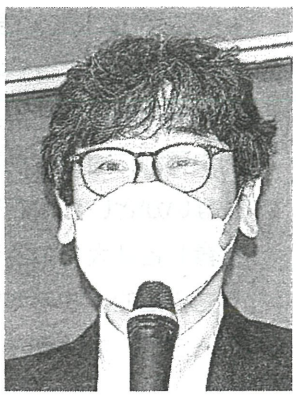
講演Ⅰ

河内　将芳　氏

（奈良大学教授）

演題

織田信長の京都宿所と地名をめぐって



織田信長は、永禄 11 年（1568）に足利義昭を奉じて上洛してから、本能寺の変に至るまでの 15 年間、京都と接点をもったが、上洛した際の滞在先として、城郭を築かず、町屋や寺院などを宿所とした。

信長は、京都に長期滞在することは避け、公家の訪問にも仮病を使って面会しないなど、伝統的な公家社会への忌避感があり、京都に城を築けるのは、武家（将軍）だけであることや、岐阜・安土を自らの拠点として意識していたことなどが指摘された。

（詳細は 2025 年 4 月発行『地名探究』掲載予定）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

講演Ⅱ

西崎　亨　氏

（武庫川女子学名誉教授・元京都女子大学教授）

声調と意味

－語源研究に資するための一つの視点－

岩崎宏美の「マドンナたちのララバイ」や CM ソングの歌詞など、親しみやすい表現を例にとりあげその「声調」による意味の違いを挙げ、語句の解釈に「声調」の視点が有効であることについて考察された。沖村由香氏の「『都藝泥布』新考」と題された論考に対して、声調の視点からの疑問点にも触れられた。

（詳細は 2025 年 4 月発行『地名探究』掲載予定）